

別添 1 議事録

議事録	
日時	2004年10月11日 11:00~13:30
場所	Tororo Girl's Highschool
面談者	Principal, subject teachers (chemistry and mathematics)
出席者	Mr. Ekol, Mr. Enjiku, Ms. Atima 岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>1965年 USAID の支援により創立。6年制全寮制女子中等学校であり、この地区での優秀校である。施設は整っているが、メンテナンスがされていないため老朽化が進んでいる。2階建ての事務棟（校長室・職員室・カウンセリング室・事務室）がある。実験室は四つあり、物理・生物・化学・一般科学用として使われている。実験器具・化学薬品類も十分ある。ただ、それらが頻繁に使用されているとは言い難い。ただ、実験助手や科学担当教員に聞くと、毎週土曜日に生徒たちを集め実験を行っているとのこと。</p> <p>● 授業観察</p> <p>2年生の化学の授業を観察した。50人程度の生徒がいた。クラスの壁が可動式のため、隣のクラスの話し声が聞こえる。床にはゴミが散乱していた。</p> <p>内容は「組成式と構造式」であった。授業の流れは、まず教師が概念を提示し、それについて説明を加え、その後それを口頭でまとめ生徒が記述するというものである。演示実験や分子模型（実験準備室には分子模型があった）の使用はなかった。また生徒に考えさせたりすることはなかった（教師中心型）。ただ、生徒に質問をする時間を与えていた。</p> <p>生徒のほとんどは教科書を持っていなかった。教員の板書と教員がしゃべることをノートに記述してゆく。よって生徒ノートには文章ばかりで図表はほとんどみられなかった。生徒が書いている間、教員は机間巡視を行っていたが、この生徒への指示は与えてはいない。</p> <p>教室の壁には何も貼られていない。教師によれば、張っていると生徒がとってゆくので、何も貼れないとのことである。</p> <p>教員の板書の使用は、黒板を3等分し、右から左に順に書いていた。ただ授業の後半はかなり雑になってきていた。また教師は黒板消しを持っていなかった。</p> <p>● 教員へのインタビュー</p> <p>この学校では能力別にクラス分けを行っている。クラス分けは学期ごとに行われている。教育省の方針ではないが、この学校では昔から行われている。</p> <p>化学担当教員（教員歴7年）は理数科の男女格差は文化的背景によって作られていると考えている。この学校では女子が理数科を苦手としていることはほとんどみられなく、成績も地域の男子と比較してもよい。ただ、男女共学校では、どのようなレベルの学校であっても、男子の成績のほうがよいことが経験上いえる。これは文化的プレッシャーによるものとする。</p> <p>優秀なAレベル生徒は都市部へ流れる。</p>	

土曜日には補習が行われ、英語と理科の実験が行われている。教員には1時間あたり Ush. 2000 (1ドル弱) が支払われている。

理数科教員に現職教員研修を受けたことがあるかと尋ねたところ、ほとんどがほとんど経験はない。少数が近く TRC で行われた研修 (2002 年に1日のみの研修) に参加したことがある。今後どのような研修を受けたいかを尋ねたところ、実験法などを中心にした実践的なプログラムを受けたい。また研修場所は、地域の中心校などで行ってほしい。地方ではアクセスが問題であるため、School-based training がよい。

以上

議事録	
日時	2004年10月12日 8:30～12:30
場所	Atiri Secondary School
面談者	Principal, subject teachers (chemistry and biology)
出席者	Mr. Ekol 岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>1985年創立。4年制公立中等学校であり前期中等課程しかない(Aレベルは設置されていない)。生徒数は400名(男300名 女100名)である。トロロの町から10キロほど離れた農村部に位置している。実験室は一つあるが、普通教室として使われている。実験器具・化学薬品類は、学校側の説明によると不足しているとのことであるが、実際には必要最低限のものはある。ただ、試験管は以前に使われたものがそのまま放置されており、保守管理は全く行われていない。</p> <p>● 授業観察</p> <p>3年生の化学の授業を観察した。1クラス30人程度であり、男子生徒の数が多。3年以降は理数科は選択になるので、選択する生徒数は少なくなる。特に女子に関しては理数科を敬遠する傾向がある。教室は雑然としており、清掃は十分ではない。</p> <p>内容は「組成式と構造式」であった。授業の流れは、まず教師が概念を提示し、それについて説明を加え、その後それに関して問題演習(はじめに教師による演示演習、その後生徒による演習)を行うものであった。問題を教員が口頭で読み上げ、それを生徒が記述するという他校でも見られた方法である。</p> <p>演習において、生徒はきわめて受動的な態度であった。教師が指名した数名の生徒が前で問題を解いている間、残りの生徒はそれをみているだけで、解答後にそれを写していた。</p> <p>計算機の使用が認められている。国家試験でも使用が認められている。そのため、すべての計算を電卓に頼っており、6×8といった計算も電卓なしにはできない。計算力の不足は、この授業の問題演習でも見受けられた。特に分子量を求める計算では、括弧の入った計算を正しく解くことができない。数学のレベルの低さが化学にも影響していると考えられる。</p> <p>板書の使い方は丁寧であった。黒板を2等分し、右から左に書いていた。また教師は黒板消しを持っておらず、紙をその代わりに使っていた。</p> <p>構造式の内容を説明するとき、例として家の構造をあげていたが、科学的に見て誤解を招くものと思われる。</p> <p>1年生の生物の授業を観察した。生徒数は1クラス100名程であった。授業は柑橘類についてであったが、地元でとれるマンゴーとオレンジを数個持ってきて、それを生徒にナイフで切って断面を観察させ、それを黒板に書かせていた。生徒への指示も的確であった。この授業は生徒の参加や日常生活との関連という点から評価できる。</p> <p>● 教員へのインタビュー</p> <p>校長へこの学校での理数科教育を行う上での問題点を尋ねたところ、実験室の不備と理数科教</p>	

員の不足があがった。実験設備を拡張していくことが理数科教育を行う上でもっとも効果的であると述べた。また理数科教員の不足も深刻であり、現在この学校では有資格の数学・物理を教えられる教員がおらず、音楽教員が数学を教えている。

この学校の教員の多くは自分の担当授業の時に学校に来て教えるパートタイムである。特に理数科教員のほとんどはパートタイムである。

以上

議事録	
日時	2004年10月13日 8:30～11:00
場所	Mubala Secondary School
面談者	Head Teacher, Classroom teacher (biology)
出席者	Mr. Ekol, Mr. Enjiku, Ms. Atima 岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>トロロの中心部から20キロ離れたケニア国境の町マラバにある私立共学の中等学校である。Aレベルはない。生徒数は約200名ほどである。校舎は1棟だけである。外壁に数式や生物標本が描かれている。大部分の生徒はケニアから越境してきている。水道はあるが電気はない。</p> <p>● 授業観察</p> <p>2年生の生物の授業を観察した。前日に授業観察を行うことを通知してあったため担当教員は授業案を準備していた。</p> <p>生徒数は57名で大部分は男子生徒であった。授業内容は「植物細胞の浸透圧」であった。授業は2コマ連続で80分授業のはずであったが、実際は2時間以上であり、ほとんどの生徒は集中力を失っていた。長時間の授業に耐えきれず、数人の生徒は途中で退出していた。</p> <p>担当教員の授業の流れは、1 概念の導入 2 説明 3 その概念に関して生徒へ質問、というものであった。導入に関しては、日常生活の接点を取り上げることはしなかった。ほとんどの説明は口頭で行われ、生徒はそれを書き取るというもので、他校でも同様の授業展開が見られた。</p> <p>事前に通知してあったせいなのか、細胞壁の断面図を模造紙に描いていた。説明文も書いてあったが、あまりにも小さな文字であったためにそれを読みとることはできない。黒板の使用は不規則に空いているスペースにキーワードを書いていた。黒板消しはスポンジを用いていた。</p> <p>生徒に質問をしていることはよかったと思われるが、授業が散漫になってしまった。教員がある同じ質問（定義を尋ねる）を違う2人の生徒にした時、その2人の生徒は全く同じ答えをしていた。定義を暗記することを重視しているように見受けられた。</p> <p>教員は教育省から配られた参考書を用いていた。ほとんどの生徒は教科書を持っていなかった。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年10月13日 11:30~13:30
場所	Tororo High School
面談者	Head Teacher, Classroom teacher (physics chemistry)
出席者	Mr. Ekol, Mr. Enjiku, Ms. Atima 岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>トコロ中心部にある私立共学中等学校である。Aレベルまでである。学校施設は非常に劣悪で天井がめくれはがれていた。トイレ付近の衛生状況は悪い。実験室はないが実験器具・薬品は校内の1室に保管されている。必要最低限はあった。</p> <p>● 授業観察</p> <p>3年生の化学を観察した。担当教員がパートタイムで定刻に現れず、1時間遅れの開始となった。生徒は24名で、女子は7名である。教室内はゴミが散乱していた。</p> <p>授業内容は「組成式」であった。授業の流れは、1 概念の導入 2 その演習というものであった。演習は教員が口頭で与え、それを生徒が書き取っていた。</p> <p>教員は黒板に丁寧に表を作りそれを用いて説明を行っていた。説明の途中にわざと間違えてみて、生徒の理解を深めようとしていた。</p> <p>生徒のほとんどは教科書を持っていない。化学の教科書は1冊 Ush. 15,000 (US\$8.6) 程であるが、ほとんどの生徒には高価で購入できないようである。ただ 1/3 程度の生徒は電卓 (Ush.5000=US\$3) を持っていた。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年10月13日 15:00～15:30
場所	Nagongera NTC
面談者	Director, lecturers (biology, physics)
出席者	Mr. Ekol, Mr. Enjiku, Ms. Atima 岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>トロロ中心部から未舗装道路を20キロ西に行ったところに位置する中等教員養成校である。ナゴンゲラ NTCは理数科に特化したNTCである。調査時は予算不足で閉鎖中であり授業観察はできなかった。1982年に創立された。</p> <p>NTCに入学する学生はAレベルを修了し国家試験(Uganda Advanced Certificate of Education: UACE)での成績基準をクリアする必要がある。2年の教員養成課程を修了すると、Diploma in Secondary Education (DSE)がもらえる。DSE取得者は、Oレベルまで教えることができる。また小学校教員のアップグレード研修(Grade3からDiploma)も行っている。</p> <p>在籍学生数は昨年度の統計で第1学年160名第2学年105名の計265名である。3学期制で1学期(10月～12月)、2学期(2月～4月)、3学期(4月～6月)である。教官は18名で、物理1名、化学4名、生物2名、数学2名である。</p> <p>カリキュラムは、チャンボゴ大学で開発されたものであり、教科教育以外に、教育心理学、教授法、教育学などがある。</p> <p>● Tororo District Teacher Resource Center (TRC)</p> <p>地域の学校からのMembership Feeで運営されている。各校1年間Ush. 35,000 (US\$20)で、会費を納めれば公立・私立校関係なく、加盟校になる。トロロ県庁舎の付近に位置する。TRC CoordinatorはRock High schoolの校長が務めている。1名のTRC Secretaryが加盟校からの年会費から雇われている。</p> <p>現在のTRCの活動は、</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 実験機材・教材の貸し出し 加盟校はTRCの機材を借り出すことができる。貸出期間は2週間。それほど頻繁に利用されていないようである。 (2) 統一試験の実施 トロロ・ブシア県の教師達が制作している。中等学校教員対象の現職研修は行われていない。 <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年10月14日8:15~11:00
場所	Rock High School
面談者	Head Teacher, Classroom teacher (biology)
出席者	Mr. Ekol, Mr. Enjiku, 岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>トロロの中心部にある公立共学中等学校である。1967年にインド人学校として開校し、アミン政権下で一般公立学校になった。Aレベルまである。設備は整っており、実験室は二つある。図書館もあり、かなりの蔵書（ロータリークラブ・カンパラからの寄贈）がある。家庭科室、美術室、製図室もある。生徒数の急増に対応するため、2部制にしている。</p> <p>● 授業観察</p> <p>3年生の生物の授業を観察した。生徒数は約60名であった。教室内の清掃は行き届いていた。担当教員は非常にベテランで（教員歴20年）、生徒への適切な対応をしていた。ただ、他の教員と同様に、教科書等を使わず口頭で説明し、それを生徒が書き取っていた。ただ、その際には明確にゆっくりとしゃべり、新しい語句や綴りの難しいものは、黒板に書いていた。また生徒に新出語句や定義の言い換えを行わせていた。</p> <p>担当教員は、自ら描いた断面図などを印刷しそれを生徒に配っていた。生徒からは非常に好評であった。学内には印刷機もあり、それをを用いているとのことである。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年10月14日12:00~13:00
場所	Mukuju Primary Teachers College (PTC)
面談者	Principal
出席者	Mr. Ekol, Mr. Enjiku, 岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>トロロ中心部から5キロほど行ったところにある初等教員養成校である。0レベルの修了者が学びGrade3の教員になる。TDMSのCore初等教員養成校（Primary Teachers College：PTC）になっているため、非常に設備が整っている。実験室もあるが、あまり使われていない。通信衛星を用いたインターネット接続もある。</p> <p>学生数は496名（男313名、女183名）である。教員養成課程（PRESET）と資格付与現職教員研修（INSET）の両方のコースがある。カリキュラムはオンライン化されており、それに基づいて教育が行われている。理数科を教える教員は4名いる。政府はPTCでの理数科教育重視を検討している。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年10月14日15:00~16:30
場所	St. Peter's College, Tororo
面談者	Principal, lecturers (biology, physics, chemistry)
出席者	Mr. Ekol, Mr. Enjiku, 岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>トロロ中心部から北東へ3キロ行ったところにある公立男子中等学校である。Aレベルまである、この地域の名門進学校である。学校設備は整っており、1960年代にUSAIDの支援により校舎が建設された。実験室も四つあり、現在改築工事が行われている。</p> <p>実験設備・実験器具は非常に充実しているが、保守管理が非常に悪く、計量天秤も壊れていた。電子天秤を必要としているという要望をあげていたが、それほどの精度が必要とは思えない。</p> <p>この学校では、理数科は全学年必修になっている。</p> <p>理数科担当教員に面接を行ったが、現在抱えている問題としては、①過剰な内容の理数科カリキュラム、②実験設備の不備（実際は非常に整っている）、③現職教員へのサポートの不備があげられた。特に③に関しては、研修がほとんど行われていないことやTRCが機能していないことなどを指摘していた。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年10月18日14:00～16:00
場所	JICA ケニア事務所 会議室
出席者	狩野所長、稲村次長、南部職員（広域事務所）、斎藤職員、清水企画調査員（広域事務所）、杉山専門家、吉川専門家、岡本
要約	
ケニア事務所との打ち合わせ	
<ul style="list-style-type: none"> ● 調査中間報告 調査団よりこれまでの調査進捗を報告した。 ● コメント ウガンダは財政支援が進んでいるので MTBF にプロジェクト予算を組み込む必要がある。また Partnership Principals によれば、すべてのプロジェクトは閣議決定が必要となっている。これより、ハイレベル会合を実施し、関係者への意志疎通をしっかりと行う必要がある。 ドナーへの根回しも十分に行う必要がある。 先方政府のオーナーシップをまず作り出す必要がある。そのために、教育省や財務省の関係者を含めた、Stakeholder 会合を行って、政府上層部の関係者に、プロジェクトの方針を決めてもらうのがよい。その際には関係者に十分に議論してもらう必要がある。 プロジェクトをどのように地方展開していくかをもう一度再考する必要がある。その際にもカウンターパート機関選定もハイレベル会合でしっかり話し合った上で決める必要がある。 教育省やカウンターパート機関からの専任のカウンターパートは必要。 上位目標はあまりかけ離れた壮大なものではなく、達成可能な目標がオーナーシップを醸成する上でも必要ではないか。 	
以上	

議事録	
日時	2004年10月19日10:00~12:00
場所	SMASSE, KSTC
面談者	Mr. Juguna, 杉山専門家、武村専門家
出席者	岡本
要約	
<p>● INSSTEP</p> <p>当方よりイギリスが行っていた INSSTEP への評価を尋ねたところ、先方より以下のようなコメントが得られた。</p> <p>(1) 良い点： 研修内容は非常に良くできていた。</p> <p>(2) 悪い点： TRC の自立発展性の低さ、TRC から離れている学校のアクセスの悪さ、内部モニタリングの低さ</p> <p>TRC の自立発展性の低さは、TRC の運営資金をすべてドナーに頼っていたことにある。プロジェクト終了後は、それぞれの地域で運営することになっていたが、ほとんど失敗している。38 県中、31 県に TRC が建設され、それぞれに TRC Coordinator (TRCC) が置かれたが、ドナー資金からの給与（月 Ush. 119,000、約 USD100）がなくなってしまった後、TRCC は TRC を去っていった。SMASSE を始めるときにこの INSSTEP の教訓を生かしプロジェクト運営を行ったことが、現在の高い自立発展性につながっていると考える。</p> <p>● ウガンダ・プロジェクトへの提言</p> <p>プロジェクトの自立発展性を高めるようにする必要がある。そのためには形成段階から、教育省のオーナーシップが必要である。プロジェクトの目的を明確にして、そのための Sensitization が必要である。特に教育省の上層部（PS）がしっかりとプロジェクトの意味を理解し、現職教員研修のシステム構築を目指す必要があるのではないか。</p> <p>SMASSE の経験から言えることは PRESET と INSET は全く異なるものであるということである。つまり教員養成を主にやっている大学教官は現場を知らないで、どうしても座学中心・理論中心になる。C/P を選定する際もこの点を踏まえる必要がある。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年10月25日 11:00~12:00
場所	Education Service Commission
面談者	Mary L. Nannono, Secretary of ESC
出席者	吉川専門家、岡本
要約	
<p>● ESC</p> <p>政府雇いの教員の採用・雇用管理（給与支払い・管理職への昇進）を行っている教育省の外郭組織である。教員の採用に関して、Appointment と Deployment の二つがある。前者は新規採用教員が政府から給与の支払いを受けることができるようになることで、後者は実際に教え始めることである。これらの二つの手続きが別々に行われていることは非効率的である。給与の支払いを受けているにもかかわらず、実際には教えていなかったり、その逆に教えているにもかかわらず、政府からの給与が支払われていないケースも頻繁に起こっている。</p> <p>現在のところ教員の採用は分権化されている。採用希望者はそれぞれの学校に直接出向き、面接等を受ける。それに合格すると、各学校が ESC を通し教育省に採用承認を申請する。</p> <p>昨年まで中等教員の新規採用は凍結されていたため（現在は再開されている）、各中等学校が独自で採用を行い、給与を PTA からの資金でまかなっていた。</p> <p>教員の給与は三つのグループに分けられる。大卒教員（Graduate Teachers）とディプロマ・グレード5（Grade 5 Diploma Teachers）とグレード3（Grade 3 Teachers）である。大卒教員を除き、グループ内の昇級はないため、昇級を望むならば、管理職になるかそれともアップグレードして大卒教員の資格を得るかである。Annual increment は非常に少ない（Ush. 2000 US\$1）。昇級については、教育省に対し教員給与の昇級制度を設立することを提言しているが、まだ実現には至っていない。</p> <p>現在 Scheme of service が策定されている。これにはどのようなことが教員の義務であるか等も検討している。現職教員研修を義務化することも考えている。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年10月27日 11:00～11:30
場所	マケレレ大学
面談者	Prof. Oswald Ndoleriire, Country Director of AICAD
出席者	岡本
要約	
<p>● 教育省内の動き</p> <p>当方より、現在カウンターパート機関の選定を行っているが、教育省内には二つの部局（中等・教師教育）があり、どちらの部局の方が本案件のカウンターパート機関に適切であるかどうかを訪ねた。Ndoleriire 教授より、教師教育局のキャパシティには問題があるが、制度上教師教育局以外に担当できない。対応策としては、教師教育局の下に独立した運営チームを組織して、プロジェクトの実際の運営を任せ、教師教育局に報告の義務を課すという形が考えられる。教育省内の動きは非常に政治的要素とリンクしており、プロジェクト運営の実務を回していきけるだけの能力は望めない。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年10月27日 15:00～16:00
場所	JOCV 事務所
面談者	Mr. George Kalibbala, Education Advisor, Royal Netherlands Embassy
出席者	岡本
要約	
<p>● C/P 機関について</p> <p>当方より、現在計画中のプロジェクトのカウンターパート機関を選定中であるが、教師教育局以外の部署が担当することは可能であるか尋ねた。先方より、すべての教員研修は教師教育局の管轄であり、それ以外の部署が担当することは非常に難しい。現状（プロポーザル）は教師教育局が担当しており、これを他の部署、特に中等教育局に移すことは非常に大きな軋轢を生み危険である。教師教育局のキャパシティに問題はあるのは認識している。その対策としては、チャンボゴ大学に実際の運営を委任するという形にしてはどうだろうか。</p> <p>現在 NTC は閉鎖されている。予算不足がその理由であるが、なぜ予算がなくなってしまったのかは明確ではない。ただ推測としては、2006 年に向けた大統領選挙に向けて、政府は教員からの支持を得るために教員の給与の値上げを発表している。その値上げの財源に、本来 NTC にゆく予算が回されてしまっているのではないかと考えられる。また学校給食を拡大する財源にも、NTC の予算が回されていると考えられる。現在政府の上層部は、すべてのことをこの大統領選に関連させて考える傾向にあり、非常に政治的な判断が働きやすい。もしこのプロジェクトで NTC を拠点にするならば何らかの措置を執らねばならない。今のところ、NTC の予算は保護されておらず、予算的に非常に不安定である。</p>	
<p>● パイロット県</p> <p>当方より、パイロット県についての意見を求めた。先方より、パイロットを選ぶことには賛成である。ただ、上述の大統領選挙の政治的判断が、パイロット選定に影響を及ぼす可能性がある。よってパイロット県選定には非常に慎重である必要がある。</p>	
<p>● 研修参加者への日当支払いについて</p> <p>当方より、本プロジェクトでは、研修参加者に対する日当宿泊費は一切出さない方針である。それらは地方政府等が負担すればよいと考えるが、他ドナーの意見はどうであるかを尋ねた。先方より、オランダ及びその他多くのドナーはその方針には賛成である。プロジェクトの自立発展性を考えると、ドナーが日当・宿泊を出すのはおかしい。以前ドナーと教育省の間で覚え書きを交わした。その中では、日当・宿泊はドナーには出さないと明言されていたが、結局は守られていない。これは、教育省側の問題（給与が低い・モラル）と一部ドナー（特に USAID）がこの覚え書きを無視して、日当を支払っていることにあると思う。このことは、改めてドナー会合で提案し、議論を深めていきたい。</p>	
<p>● その他</p> <p>アフリカ開発銀行（African Development Bank : ADB）も類似の案件を実施しているので、ある程度の連携を探れるのではないかと提案を受けた。当方より、近日中に連絡を取ると返答した。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年11月3日 11:00~12:30
場所	ンコジ NTC (Nkozi National Teacher College)
面談者	Ms. Nabukenya M.A. Director of NTC, 梅木隊員
出席者	岡本
要約	
<p>● Nkozi NTC</p> <p>Nkozi NTC は学生数 3,067 名（男子 1,462、女子 1,205、中等教育課程在籍者 1,727 名）の国立中等学校教員養成校（1984 年創立）である。学生は学内の寮もしくは学校周辺の借家に住んでいる。Diploma in Secondary Education (DSE) と Diploma in Primary Education (DPE) の 2 種の課程を提供している。中等学校養成校であるが、無資格初等教員への資格付与研修（ウガンダでは資格付与研修のことを In-service training と呼び、すでに資格のある教員が技能向上のために受ける研修を Refresher course と呼んでいる）も学期休みの年 3 回行われている。</p> <p>年間予算は、64 万ドル（6,800 万円）である。90%が経常費に当てられている。年間予算の内、政府からの支援は 25%程である。</p> <p>教員は 57 名で、うち理数科（農業を含む）の教員は 9 名である。理数科を専攻している学生は、1,727 名中 6%に当たる 102 名である。</p> <p>設備は、コンピューター室・図書館はあるが、それら以外の施設は非常に劣悪な状態である。特に普通教室は、窓も壊れ机もなく、学生は長椅子に座り、膝の上にノートをとっているとのことである。実験室もあるが、ほとんど使われておらず、実験器具などはほとんどなかった。</p> <p>訪問したときは、予算不足のため閉校となっており、教員だけが来ており会議を持っていた。予算不足のため、学内に家畜（豚・鶏）を飼い、それを学生の食事に当てている。</p> <p>政府の NTC 再編（現在全国に 10 校あるのを 6 校に縮小）により、来年より政府からの支援がなくなるため、現在来年以降の生き残りを検討している。現在のところ、キリスト教団の支援を受けて、私立の 2 年制総合短大として再出発を考えている。職業訓練、ビジネストレーニングを主にしながら、地域のニーズに応じていく。</p> <p>校長に政府の方針（NTC 再編）について尋ねたところ、政府の方針は非常に変化が激しく現場はそれに振り回されている。以前政府から、理数科専門 NTC に Nkozi NTC になるという通達があり、それに対し設備拡充を行いかけたが、結局その後その方針は覆され、理系・文系の総合 NTC になることになった。</p> <p>校長に理数科教育の現状について尋ねたところ、理数科系を専攻する学生が少ないことが問題である。来年以降政府は前期中等教育において理数科を必修にするとの方針であるが、現状では理数科教員は不足しており、専任の理数科教員のいない学校も出てくる。また教員の質、設備の不足も問題である。</p> <p>TRC に関しては、40 キロ離れた Mpigi にあるが、あまりにも離れており周辺の学校の教員がそこに行っているという話は聞かない。</p>	
以上	

議事録	
日時	2004年11月3日14:00~16:00
場所	Bukulura Secondary School
面談者	Headmistress of Bukulura Secondary School Head of Science Department 富岡隊員
出席者	岡本
要約	
<p>● 理数科教育の現状</p> <p>当方より理数科主任に理数科教育の現状を尋ねたところ、生徒の意識・関心の低さ、設備の不足が問題である。生徒たちは、理数科の概念の理解はしているが、それを応用はできない。また計算力が非常に弱い。その一つの要因として、計算機の使用が認められていることにある、1990年代前半に、計算機の使用が認められ、国家試験での使用も認められている（関数計算機能のついたものは認められていない）。これにより、非常に簡単な計算でも電卓なしにはできなくなっている。これは非常に問題である。</p> <p>Masaka 県を中心として、2-3の団体が国家試験模試を行っている。生徒一人あたり Ush 30,000 から 50,000 (USD17-29) を徴収している。学期休み中の有料の補習は政府から禁止されているため行っていない。また、地域の教員が自分のノートをまとめたもの（パンフレットと呼ばれる）を販売している。このパンフレットを参考にして学んでいる生徒はかなり多いが、内容は問題である。科学的に誤りが含まれている場合が多々あり、また構成も非常に問題があり、生徒には政府で認可されている教科書の使用を勧めている。</p> <p>TRC について尋ねたところ、1番近い TRC は20キロ離れた Masaka にあるが、そこで何か研修が行われているという話は聞いたことがない。以前赴任していた地区では TRC の活動に参加したことがあるが、ここでは活動は行われていない。TRC はアクセスが問題であり、多くの学校はそこに行くための交通費を支給することができない。</p> <p>● 学校の現状</p> <p>学校は生徒数300名程の女子校である。前期・後期中等課程（O-Level, A-Level）をもつ。理数科教員は6名いるが、政府から給与の出ている教員は3名で、残り3名の給与は学校が負担している。実験室・コンピューター室を備えている。実験室には十分な機材もあるが、配属されている隊員によると、実験は行われていないようである。</p> <p>コンピューターに関しては、約20台の中古コンピューターが Computers for Africa という欧米の団体により寄付されている。コンピューター教員によれば、生徒たちは非常に熱心にコンピューター実習（Word, Excel）を行うが、理論になると理解は低くなる。1-2年生は必修であるが、3年以降は選択となる。</p> <p>当方より校長に現在抱えている問題について尋ねたところ、予算不足が深刻である。理数科に関しては、実験設備が不足しており、これが生徒の理数科理解の妨げになっている。これ以外の問題としては、理数科は男子のものであるというバイアスがあり、女生徒は学ぶ前からあきらめている部分がある。このような生徒の意識を変えるために、3名の教員でティームティーチングを行っている。これにより生徒の意識の変化が見えてきている。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年11月4日 11:00～13:30
場所	Kaliro NTC
面談者	Principal and deputy principal of Kaliro NTC, 樋口隊員
出席者	岡本
要約	
<p>● Kaliro NTC</p> <p>Kaliro NTCには中等教育課程（1,173名在籍）と初等教育課程（737名在籍）がある。中等教育課程全在籍者中、理数科専攻は約25%の294名である。教員は44名おり、うち理数科は13名である。初等教育課程は資格付与の現職教員研修である。</p> <p>学内には、普通教室、実験室、コンピューター室、教員住宅がある。樋口隊員によれば、このNTCはイギリスの援助によって作られたようである。実験室内は非常に乱雑で、ほとんど掃除が行われていない。これに対し備品室内は比較的整頓されており、薬品・実験機材は十分にある。配属されている隊員によれば、実験はほとんど行われておらず、理数科の授業は理論の講義が中心である。現在は予算不足で他のNTCと同様に閉校されており、学生はいない。生徒の学力について樋口隊員に尋ねたところ、生徒の学力差は非常に大きい、やる気はある。</p> <p>校長と副校長に理数科教育の問題点を尋ねたところ、設備の不足が問題であり、実際に赴任した学校にはほとんど実験器具がなく新任教員は非常な問題に直面している。先方より、NTCの教員への研修を行ってほしいとの要請があった。Kaliro NTCが閉校になるとの新聞報道があったがその真偽を尋ねたところ、それは誤報であり、来年度以降も引き続きNTCとして存続していく。理数科系を強化していく予定であるが、政府の方針が不明なため、将来このNTCがどのようなようになっていくかは分からない。</p> <p>当方より計画中のプロジェクトのことについて説明したところ、先方よりそのようなプロジェクトは歓迎する。ただ地方と中央にはかなりの隔絶がある。これまで行われてきたプロジェクト（INSSTEPなど）は中央主導で行われ、現場をほとんど巻き込むことはしなかった。また資金もドナーから頼っていたため、ドナーが引き上げてしまうと全く機能しなくなってしまった。本プロジェクトはそのようなことにならないために、地方分権型でかつ財政面でも持続性があるようにしてほしい。理数科のニーズはあるので、是非このNTCとしても協力したい。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年11月4日14:00~14:30
場所	Kaliro PTC
面談者	坂本隊員
出席者	岡本
要約	
<p>● PTCの現状</p> <p>Kaliro PTCはTDMS（初等教育改善プロジェクト）の中心校（Core PTC）ではない。そのため学校内の設備は非常に悪い。実験室は最近新しく建てられた。他のCore PTCの実験室と同様の仕様で建設されている。前期中等教育を終了した学生がPTCに入学してくるが、学生の能力差は非常に大きい。特に理数科の成績が悪く、1/3程度の学生が理数科の進級試験に落ちており、進級できずにいる。2年で卒業できない生徒は、Repeaterと呼ばれ、学校には来ているが授業を受けることもなく、暇を持て余している。手の空いている教員がRepeater対象に補講を行っている。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年11月9日12:00~13:30
場所	Tororo District Education Office, Tororo Local Government
面談者	D. G. Yona, District Education Officer
出席者	Mr. Buyisi, Principal Education Officer, MoES 岡本
要約	
<p>● プロジェクトの概要説明</p> <p>当方より現在計画中のプロジェクトの概要説明を行い、どのように現場の教員に裨益するようになればよいかの意見を尋ねたところ、先方よりプロジェクトを歓迎する。多くの学校では理数科教員は不足している。数学の教員がいない学校もあるようである。ただ中等教育は中央の管轄であるので、地方政府（トロロ教育事務所）は中等教育の実状もよく把握していないのが現状である。中央政府から十分な監督は行われていないため、中等学校は個々の裁量で学校運営を行っている。予算に関してはそれが顕著である。当方より、Capitation Grant (CG) の一部（数%）を研修の経費に当てることは可能かと尋ねたところ、それは可能であると思われる。CGは学用品購入等の経常経費に当てられることになっており、その中には教員が参加するワークショップへの手当も含まれると理解している。ただ、このCGを研修経費に充てるためには、中央からの認可と、この県の校長会からの許可がある。とくに、校長会は非常に重要である。もしプロジェクトが始まれば、教育事務所は協力は惜しまない。ただ、どのような形にするかは、中央政府と校長会との協議で決めてほしい。</p> <p>● トロロ県の教育事情</p> <p>理数科教員トロロ県には52の中等学校がある（公立25校 私立27校）。中等学校の生徒数は、7,428名である。生徒一人あたり1か月約0.9ドルのCGが中央政府より、各学校へ配分されている。生徒の中にはケニアから越境している者がかなりいる。とくに初等教育ではそれが顕著である。ナゴンゲラには中等教員養成のNTCがあるが、現在財政上の問題しまっている。このNTCは理数科に特化したNTCであるので、プロジェクトを行っていく上で重要な拠点になり得るのではないか。理数科教員に関しては、地方教育事務所はほとんどその実体を把握していない。統計に関しても、中央から調査票が送られてきたが、県教育長（District Education Officer : DEO）としてはそれを各学校に配り回収するのみであるため、実際の状況は分からない。ただ一つ言えるのは、大卒教員は非常に少ないと思う。ほとんどの教員は、NTCなどを出ている短大卒の資格であると思う。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年11月9日 15:00～15:30
場所	Tropical College, Tororo
面談者	Head teacher of Tropical College, Tororo
出席者	Mr. Buyisi, Principal Education Officer, MoES 岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>トロロの中心から5キロ程行った道路沿いにある私立中等学校である。Aレベルまである。生徒数は300名ほどの小規模である。理数科教員は、4名（物理・数学1名、化学・生物2名、農業1名）である。1学期あたりの学費は寮生が Ush. 133,400 (USD 76)、通学生が 85,400 (USD 49) である。年間は、寮生が 228 ドル、通学生が 150 ドルである。学費は現地の生活レベルと比較してもかなり高いものであると思う。</p> <p>学内に新たに教室と実験室を建設中である。学生数は年々増えている。実験室には木製のキャビネットがあり、そこに薬品・実験器具（秤・顕微鏡）が入っている。数量は少ないが、必要最低限のものはある。ただ、メンテナンスはほとんど行われていない。</p> <p>● 教員面接調査</p> <p>これまでどのような現職教員研修を受けたことがあるかを尋ねたところ、理数科教員のほとんどは、全く受けたことがないと答えた。一人のみ TRC で行われた1日の研修に参加したと答えた。実践的研修を受けたいと希望している。</p> <p>TRC の利用状況を尋ねたところ、ほとんど利用していない。年会費は Ush. 35,000 (USD 2) は払っている。参考書を借りている程度である。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年11月11日12:00～13:30
場所	Kamuli District Education Office
面談者	Charles Akoyo , District Education Officer
出席者	岡本
要約	
<p>● プロジェクトの概要説明</p> <p>当方より現在計画中のプロジェクトの概要説明を行った。先方より、プロジェクトは非常に重要なものであると考える。まず教員の意識変革をする必要がある。多くの教員は実験設備の不足を理由にそれ以上働こうとしない。しかし身の回りにある物を使えば、実験はある程度出来できるはずである。なんでも援助に頼っている姿勢を変えなくてはいけないと考える。UPE 政策の下、就学者数は増加したが、質は大幅に低下している。その意味で、本プロジェクトが質の向上に寄与すると思う。</p> <p>● カムリ県の教育事情</p> <p>当方より中等教育統計の情報を求めたところ、先方より初等教育は地方分権化されており情報はあがるが、中等教育に関しては、ほとんど関知しない。これは非常に問題であると考え、現状の制度ではどうしようもない。教育省が統計等を管理しているので、そちらを当たってほしい。東京行く事務所で把握している中等学校数は72校登録されている。</p> <p>当方より理数科教員協会の有無を尋ねたところ、先方よりそのような組織を作ろうとする動きはかつて何度もあった。チャンボゴ大学が中心となって、その組織委員会まで形成したが、結局政府からの予算が入ってこなく、その話はなくなってしまった。</p> <p>当方よりCGを教員研修経費に用いることの可能性を尋ねたところ、先方よりそれは現地校長会と教育省の合意があれば可能である。ただカムリ県においては、CGは非常に不安定で、安定して中央政府から送られてこない。その辺の問題をクリアにしておく必要があるのではないか。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年11月11日14:30~15:30
場所	Busoga Highschool
面談者	Mr. Kajiba Charles (077-587300), Chairperson of Head Teacher Association, Kamuli District
出席者	岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>カムリの中心から3キロ程行ったところにある男女共学公立中等学校である。Aレベルまである。生徒数は800名(O-level: 590 A-level:210)である。全教員は40名で、うち理数科教員は18名である。1学期あたりの学費は寮生がUsh. 216,000 (USD 123)、通学生が146,000 (USD 83)である。年間、寮生が369ドル、通学生が249ドルである。</p> <p>実験設備は整っている。実験室も三つあるが、どれも非常に状態がわるい。4年ほど前に教育省よりこの学校がクラスター中心校として指定され、実験器具が集中的に配備され周辺校がそれらを借りることができるようにした。しかしながらこの計画は全く機能していない。</p> <p>● 教員面接調査</p> <p>当方より校長へ計画中のプロジェクトの概要を説明した。先方より、プロジェクトを歓迎する。中等教育とりわけ、理数科教育は質の改善を必要としている。カムリ県は非常に大きいので、研修を行うなら、いくつかの郡の中心で行うことを希望する。考えられるのは、カムリとNTCとPTCのあるカリロの二つがアクセスの面でもよい。</p> <p>当方より校長会として理数科教育改善のために何か具体的行動をとっているかを尋ねたところ、先方より、理数科教育改善のためのワークショップを企画している。ただまだ企画の段階であるので、はっきりしたことは決まっていない。</p> <p>当方より研修経費を地元で負担できるかどうか可能かどうか尋ねたところ、先方よりそれはかなり親の抵抗があると思う。カムリ県では、UPE政策は、中央が思うほどスムーズにっていない。その理由は、カムリ県出身の政治家が選挙の際に、初等教育にかかる経費がすべて無償になると行っていたため、それを多くの親は信じている。よって、IDカードを作る費用(Ush. 500 : USD 0.3)でも出さない。地方の傾向として外部からの支援に頼り切っている。それに政治的な思惑がからむと非常に問題は複雑になる。ただ、教員の能力向上は、長期的視点で望まなくてはいけなく、外部に頼り切っていたINSSTEPなどは、ドナーが引き上げてしまうとすべてが終わってしまうようなことは避けないといけない。その点において、地方での経費負担は必要であると考え。ただ、その財源をどこから持ってくるかが問題であるし、実施する前に地元を巻き込んだ十分な議論が必要であろう。当方からCGの一部を当てるのはどうかと提案したところ、先方よりそれは可能であるが、中央からの認可が必要である。</p> <p>当方より理数科教員にどのような研修を望むかを尋ねたところ、UNEBスタンダードを理解している教員を講師としてほしい。</p>	
以上	

議事録	
日時	2004年11月15日8:30~9:30
場所	Kyambogo University
面談者	Prof. Albert J. Lutalo-Bosa, Vice Chancellor of Kyambogo University
出席者	吉川専門家、岡本
要約	
<p>● プロジェクトの概要説明</p> <p>当方より現在計画中のプロジェクトの概要説明を行った。先方より、プロジェクトは非常に重要なものであると考える。理数科教員の不足は深刻であり、教員数を増加させる必要性は緊急の改題である。理数科教員の質の向上に関しては、Aレベル卒業後、これまで学んできた理数科の内容を総復習する1年間のコースを設置することを提案している。現状では、中等教員養成校（NTC）に入学してくる学生の多くは、理数科の理解が低い。理数科の強化知識を十分なものにした上で、教育課程を受講すれば、それは質の高い教員を排出することにつながり、全体の底上げになる。理想を言えば、現職教員研修と教員養成の両方に対するプロジェクトを実施してほしいが、予算・人繰りなどで難しいことは理解している。どちらを先に取り組むべき課題かと言えば、現職教員研修であるとする。</p> <p>● チャンボゴ大学からの協力</p> <p>当方より計画中のプロジェクトに、チャンボゴ大学がどのような協力ができるかを尋ねた。先方より、教師教育を担っているのはチャンボゴ大学であるので、積極的に協力したい。チャンボゴ大学から、2名程度の常勤のカウンターパートを出すことは可能であるとする。ただ、各教科から一人ずつ計4名は難しい。場所の提供も可能である。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年11月15日10:00~11:30
場所	National Curriculum Development Center (NCDC)
面談者	Mr. Eria Twinomugisha, Project Manager of Science and Technology Equipment Production Unit (STEPU)
出席者	吉川専門家、岡本
要約	
<p>● STEPUP</p> <p>STEPUPは1987年に始まった教育省が主管して行っているプロジェクトで、以下の四つのことを目的に行われている。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 低価格実験機材の開発（初等・中等学校両方） (2) 実験機材の修理・保守管理と実験室でのガス・水道配管の設置 (3) 実験助手対象に実験機材修理の研修実施 <p>NCDC内に事務所と実験機材製作所がある。予算は、ウガンダ政府から出ているが、一部アフリカ開発銀行（ADB）からの機材供与（実験機材製作用の機器）を受けている。ADBのEducation 2 Projectの1コンポーネントであるジェンダー配慮の理科実験手法（Gender-sensitive Laboratory Practice）を委託実施している。</p> <p>これまで実験機材修理研修は10-15回ほど行われている。各回20名ほどの実験助手や理数科教員が参加している。期間は5日間である。ジェンダー配慮の理科実験手法研修は、これまで2回行われ、各回50名の理数科教員・実験助手を対象にしている。期間は4-5日間である。いずれの研修も、すべての経費をSTEPUPが負担している。研修参加者は、STEPUPが選んでいる。</p> <p>現在抱えている問題は、1プロジェクトの予算がしばしば遅配される、2施設の老朽化、3輸入実験器具との競争である。とくに3に関しては、STEPUPで制作・販売している実験機材は、輸入品（インド・中国製）よりも価格が高くなってしまふ。これは生産コストが高い現状によるものである。以前は、すべての学校はSTEPUPから実験器具の購入を義務づけられていた。しかし、現在はその規制はなくなったため、外国製品に押されている。</p> <p>実験助手は、Aレベルを卒業した後、Diploma in Science以上を持っていることとなっている。チャンボゴ大学では、実験助手のためのコースがあり、終了すると学位がもらえる。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年11月16日10:30～11:30
場所	Mudende District Education Office
面談者	District Inspector of Schools, Mubende District
出席者	Mr. Buyisi Kaddu, MoES、岡本
要約	
<p>● プロジェクトの概要説明</p> <p>当方より現在計画中のプロジェクトの概要説明を行った。先方より、理数科教員、特に数学教員の不足はこの県では深刻である。また多くの中等学校教員は現職教員研修を受けていないので、プロジェクトの与える効果は大きい。</p> <p>● ムベンデ県の教育事情</p> <p>当方よりムベンデ県の教育事情を尋ねたところ、先方より他の県と比較しても教育レベルは低いと思われる。その一つの理由は地理的な問題で、1991年にカンバラからの幹線道路が完成するまでは、アクセスが困難で経済開発が遅れていた。</p> <p>県内には約90校の中等学校があり、そのうち67校が私立で公立は23校しかない。生徒数は約2万人で公立・私立校に1万人ずついる。</p> <p>理数科教員特に数学教員の不足は深刻である。よって多くの学校では、理数科教員は常勤ではなく、非常勤（パートタイム）である。数学教員の需要は非常に高く、非常勤で1校あたり月給Ush. 100,000（US\$60）をもらっていると思われる。</p> <p>経済的に厳しい現状に対し、県では地方政府が徴収する税金の一部を使い奨学金制度を作っている。年間78名に奨学金を支給しているが、非常に額は少額である。また地方税の徴収が十分でないため、奨学金にまわす予算がない年が多く、十分に機能していない。</p> <p>県教育事務所は、初等教育の分権化を受けて、初等教育を統括しているが、中等教育は中央政府の管轄下にあるため、ほとんど関知していない。初等教育の統括だけで教育事務所のキャパシティのほとんどを使っており、現在のところ、中等教育を見る余裕はない。</p> <p>校長会に関しては、初等教育の校長会は活発に活動しているが、中等教育はほとんど活動していない。</p> <p>これまでにアメリカのNGOのUPHOLDが理数科の現職教員を行った。県教育事務所の敷地内にあるTRCは完全に閉鎖されて機能していない。これは地域からTRC運営予算を捻出できないことにある。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

議事録	
日時	2004年11月16日 14:00~15:00
場所	Kasenyi Secondary School
面談者	Mr. Kabona, The Head Teacher
出席者	Mr. Buyisi Kaddu, MoES、岡本
要約	
<p>● 学校施設調査</p> <p>ムベンデの中心部から500m程離れたところにある。O、Aレベルまである公立共学中等学校（通学生・寮生）である。この地域ではレベルの高い学校である。Aレベルに関しては、教育省からの認可を受けていないので、私立扱いになっている。</p> <p>生徒数は550名（Oレベル450名 Aレベル100名）で、教員は26名（政府雇い23名、学校雇い3名）である。理数科教員は8名（数学3名 理科5名）である。</p> <p>実験室は二つあり、実験機材・薬品はそろっている。図書館には、テキサス州から寄贈された本が所蔵されていた。</p>	
<p>● 聞き取り調査</p> <p>当方より学校の抱える問題を尋ねたところ、先方より教育省は新規設立学校やシード・スクール(Seed School)を支援することには非常に熱心であるが、既存の学校に対しては、ほとんど関心がない。</p> <p>理数科教育に関しては、学校としてS1からS4まですべての理科は必修としている。生徒の理解度を上げるために、早朝の特別授業を行うように教員に指導している。</p> <p>学費は0レベルが、通学生 Ush. 59, 200 (US\$33)、寮生 Ush. 146,200 (US\$84) である。年間では、通学生約 US\$100、寮生 US\$250 である。</p>	
<p>● 2005年度学期スケジュール</p> <p>(1) 1学期： 2月7日～ 5月6日 授業日数 89日</p> <p>(2) 2学期： 5月30日～ 8月26日 授業日数 88日</p> <p>(3) 3学期： 9月12日～ 12月9日 授業日数 88日 計271日</p>	
<p>● Comprehensive Highschool Mubende</p> <p>ムベンデの町のはずれにある私立校である。生徒数は154名で全員通学生である。1学期の学費は Ush. 41,200 (US\$ 26) で年間 US\$78 である。設備・マネジメントは非常に悪く、教育が行われているとは言い難い。ただこのような学校にも最低限の実験器具はあり、木製のキャビネットに保管されていた。</p>	
以上	

議事録	
日時	2004年11月16日15:30～16:00
場所	Mudende National Teacher's College
面談者	Deputy Director of Mubende NTC
出席者	Mr. Buyisi Kaddu, MoES、岡本
要約	
<p>● ムベンデ NTC</p> <p>ムベンデ NTC は職業訓練（農業・ビジネストレーニング・工業・美術）に特化した中等学校教員養成校である。学生数は昨年度で 844 名である。予算不足のために 10 月から始まる新学期が始まらなかったが、11 月 13 日よりようやく再開できた。ただ、学生・教官の集まりが悪く、実際の授業再開は来週以降（11 月 22 日以降）になる見通し。</p> <p>施設はかなり老朽化しており、保守管理も適切に行われていない。</p> <p>当方より政府内では NTC を卒業した教員（Grade 5 teachers）はほとんど市場価値がないと言われているがそのことについてどのように考えるかを尋ねたところ、先方より確かに都市部ではそうであるかもしれないが、地方とくにムベンデ県では、Grade 5 teachers の需要は高い。特に理数科の教員は大幅に不足しているため、Grade 5 teachers は地方では求められている。一般に大卒教員（Graduate Teachers）がいい教員となっているが、教えることと有名大学を出ていることはほとんど関係なく、Grade 5 teachers でも非常に優秀な教員もいる。今必要なのは、それぞれの教員養成機関での質的向上と量的拡大を両方取り組んでいかなければいけないことである。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

別添 2 第 1 次事前評価調査団日程

	研修計画 (ケニア事務所)	小川T長 (団長)	岡本 (協力企画)	フライト	宿泊地
10月5日			成田(10:55)>>ロンドン(15:15)	BA006	機内泊
10月6日			ロンドン(19:25)>>カンバラ(05:40) 大使館表敬・TDMS-SS Technical WG	BA063	カンバラ
10月7日			TDMS-SS Technical WG		カンバラ
10月8日			教育省との協議		カンバラ
10月9日			資料整理		カンバラ
10月10日			資料整理		カンバラ
10月11日			ベースライン調査		地方
10月12日			ベースライン調査		地方
10月13日			ベースライン調査		地方
10月14日			ベースライン調査		地方
10月15日			ベースライン調査		カンバラ
10月16日			カンバラ(09:20)>>ナイロビ(10:25)	KQ411	ナイロビ
10月17日			資料整理		ナイロビ
10月18日			事務所表敬・ケニア事務所との協議		ナイロビ
10月19日			ケニア事務所との協議		ナイロビ
10月20日			ケニア事務所との協議		カンバラ
10月21日			ナイロビ(13:30)>>カンバラ(14:35)	KQ412	カンバラ
10月22日			教育省・C/P機関との協議		カンバラ
10月23日			教育省・C/P機関との協議		カンバラ
10月24日			資料整理		カンバラ
10月25日			資料整理		カンバラ
10月26日			TDMS-SS Technical WG		カンバラ
10月27日			TDMS-SS Technical WG		カンバラ
10月28日			教育省・C/P機関との協議		カンバラ
10月29日			Task Force会議		カンバラ
10月30日			資料整理		カンバラ
10月31日			資料整理		カンバラ
11月1日			Education Sector Review会合参加		地方
11月2日			Education Sector Review会合参加		地方
11月3日			Education Sector Review会合参加		地方
11月4日			Education Sector Review会合参加		カンバラ
11月5日			Education Sector Review会合参加		カンバラ
11月6日			資料整理		カンバラ
11月7日			資料整理		カンバラ
11月8日			Education Sector Review会合参加		カンバラ
11月9日			Education Sector Review会合参加		カンバラ
11月10日			Education Sector Review会合参加		カンバラ
11月11日			Education Sector Review会合参加		カンバラ
11月12日			Education Sector Review会合参加		カンバラ
11月13日			資料整理		カンバラ
11月14日			資料整理		カンバラ
11月15日			教育省・C/P機関との協議		カンバラ
11月16日			教育省・C/P機関との協議		カンバラ
11月17日			教育省・C/P機関との協議		カンバラ
11月18日			教育省・C/P機関との協議		カンバラ
11月19日			教育省・C/P機関との協議		カンバラ
11月20日			資料整理		カンバラ
11月21日			資料整理		カンバラ
11月22日			教育省・C/P機関との協議	未定	カンバラ
11月23日			教育省・C/P機関との協議	未定	カンバラ
11月24日		成田>>ロンドン	教育省・C/P機関との協議		カンバラ
11月25日	ナイロビ>>カンバラ	ロンドン>>カンバラ (早朝着)	教育省・C/P機関との協議		カンバラ
11月26日	ワークショップ	ワークショップ	ワークショップ		カンバラ
11月27日	M/M協議・署名 カンバラ>>ナイロビ	M/M協議・署名	M/M協議・署名		カンバラ
11月28日		カンバラ>>ナイロビ	カンバラ>>ナイロビ		カンバラ
11月29日	SMASSE-WECSA実施体制に関する協議 (ケニア事務所、地域支援事務所、SMASSE-WECSA事務局)	SMASSE-WECSA実施体制に関する協議 (ケニア事務所、地域支援事務所、SMASSE-WECSA事務局)	SMASSE-WECSA実施体制に関する協議 (ケニア事務所、地域支援事務所、SMASSE-WECSA事務局) ナイロビ>>カンバラ		カンバラ
11月30日		ナイロビ>>>ロンドン、ロンドン>>	大使館報告、今後のスケジュール確認		カンバラ
12月1日		>>成田	カンバラ>>>ロンドン ロンドン>>		機内泊
12月2日			>>成田		